

質問調査での主語に用いる人称と回答傾向に関する研究

1250424 尾崎陽光

指導教員 日道俊之

研究背景

アンケート調査で用いられる質問文には、主語として「わたし」や「あなた」といった人称が用いられる。それらの人称にはそれぞれの特性があり、先行研究によると三人称代名詞を用いて自己を見つめるとネガティブな事柄に対しポジティブな影響が見られることがわかっている。そこで、質問項目で用いる人称を変更した際に回答傾向に変化が見られれば、既存の研究に追試の余地が生まれる。

研究目的

回答者の普段の状態を尋ねる尺度において、用いる人称を変更した際に回答傾向に変化が生じるか探索的に検討した。また、三人称を用いると不安の低下が見られるか検討した。

調査・分析方法

Qualtrics を用いてウェブ調査を行った。回答者は三条件（一人称条件・二人称条件・三人称条件）にランダムで分けられ、それぞれの人称を用いた同じ質問に回答してもらった。尺度として、STAI と BIG5 を用いた。その後、参加者属性について回答してもらった。分析については、条件ごとに探索的因子分析を行ったのち、尺度得点の平均点を算出し、下位尺度得点ごとに条件間差の分析を行った。

分析結果

因子分析の結果、三人称条件において協調性因子に属する 10 項目のうち 8 項目で、意図しない因子に負荷を示すなどの結果がみられた。尺度得点を用いて分散分析をした結果、全ての尺度得点に有意な条件間差はみられなかった。

考察・結論

因子分析の際に先行研究と比較して意図しない因子に負荷を示した項目数が多かった。この事柄について、サンプルサイズが少なかったことにより生じた可能性と、人称を用いたことにより生じた影響である 2 つの可能性が挙げられた。また、三人称条件で不安得点の低下が見られなかったことについて、回答者は回答の対象となっている自分を見つめている状態であり、一人称条件・二人称条件においても三人称視点で回答されている可能性がある。また、本研究で尋ねた項目は普段の自分の状態というあいまいなものであったため、回答者がネガティブな感情を持っていなかったために効果が現れなかった可能性がある。